

備陽史探訪

NO. 27

特集 昔のお話

- P1 昔話の重要さ 匿名希望
- P2 瀧神社の由来について 末森清司
- P5 馬乗観音堂 塚本彰
- P7 吉備真備伝説 阿部厚子
- P11 古墳研究部情報 山口哲晶
- P12 閑話休題 高橋義規
- P15 伝説 斎藤実盛塚の由来 桑原完二
- P16 城郭部会情報
- P17 沼陽郡の大庄屋有木家 宮宗正人
- P19 小さと断章 石井良枝
- P22 十月の行事案内
- P23 古(大和)を偲ぶ 勘定奉行 井上夕千之介

24 編集後記

発行

備陽史探訪の会

事務局

〒720 福山市西平町 7-2-7
神谷和孝

昔話の重要さ 匿名希望

昔話の伝承は個人差が非常に大きい。しかし、信仰、年中行事等の村の生活や民俗とかけ離れて存在はしない。だから村を調べるとは昔話を調査しなければならぬ。又、語り手と聞き手によって構成されていった為、聞き手と語り手が変ると内容がかわってくる。又、昔話の結末句、形式句等も地域によって変りあり。此は江戸時代の藩政の巨分と一致したり、自然的な条件によつて変化をよげた。と、ある書物に出ている。此が重要である。

倉^{かさ}神社の由来について

三原市新倉町追の谷に「かさ」がサ
さんと呼ばれてゐる。ちいさな神社
がある。約五、六坪位の境内に在殿
拜殿割居がある。この神社一般に
市販されてゐる地図には記入され
ていないが毎日多くの信者の方々
がお詣りされてにぎわつてゐる。
月の十二日は祭日であり、だん
日より多くの人々の参拜があるが
年一度の大祭の十月十二日は終日
人の列かどまぬる事のないにぎわ
いである。

この神社の祭神の名称は不名で古
来より女の神様であると伝へられ
たけである。が「瘡の病」(一般的に皮
膚病)「ほウそウ等」を直して「子
神様」としてあがめられ、こららの
病にかこつた人が詣り願ひごとと

して信心した所、靈験あり病が
直つたとの多くの人々の口伝により
広まり遠くは九州四国岡山より
三原市近郊の市町村より、多く
の信者の方々が参詣されてゐる。
近年は医学薬学として漢方の普及
により「ほウそウやらい」等の病は撲
滅され今では見られなくなつたが、交通
事故やケガ等、外科の後重症や神経
痛、リュウマチ、直りにくい皮膚
病等の病をこつた人々の参詣は多
い様である。
又、時代の流ふか入る、新穀等もあ
り、早朝のツヨキニダるかぬた信者
の参拜も多くみられる。
この「かさ」が「かさ」の由来については
この單の人々もくわしい事は不名
との事であるが、次の二通の説が伝
へてゐる。

その一

昔、年代は定かでない。一人の
 美娘が旅の途中この里にて病で
 行き取られぬ由、里人が見つけあ
 りぬみ御器川(おとが御井戸の名)
 の水をもくんで飲まし、心づくしの
 手当をした所、数日後病は全快し、
 娘大変長び旅たつ者、自分をまつる
 と多くの人々の難儀を救う事がお
 来りであらうと伝之消之去つた由
 里人信心厚くその井に詣られし神
 も今の場所に移し、社殿を建て詣り
 し所、うめさそ圃を、人々が詣り
 願をかげ、長所霊験あり病いか直る
 との幸で、以後口伝之にて途々伝
 まり今の様に参拜者が多くなつた由

その二

昔、伝之に依ると若し娘が瘡に
 犯されこの里にきてたおれた。
 里人が夏つ御器川(井戸の名)の

水にて手当をほごし心づくしの
 介抱した、がその甲斐もなく永眠す
 る。娘永眠する直前自分をまつる
 と里人の御礼として瘡や病で難儀
 する多くの人々を救う事がお来り
 依つて社(やしろ)と建てまつりせ

よと伝之たり。
 里人娘をあわれみ伝言通り社を建
 て詣をまつた。その後、里人の
 中にほうそや病にかこり難儀す
 るがこの神に願をなすり詣り、
 病はちまちい之全快す。以後この
 うめさを圃した瘡や難病で苦しむ
 人がたづぬ詣りし、願かけをし、行
 霊験あり病は全快したとの幸。
 以来多くの人が口伝にてこの神を
 し、い参詣する人々年々多くなり
 今に至つていふとの幸。

以上の様に二通りの伝之があり、

馬乗観音堂

山野馬乘山山頂(五〇米)に観音堂あり
ます私は年三三回参ります

本尊は十二通千手観音で創建は後朱雀
天皇の長久二年(九百年以前)である

昔備中矢掛の里に新五平といふ人あり

深く観世音を信仰し世の人からも深く尊敬
を受けて居た

或る年の春夕暮の事歳の頃十四五と見え
る少女が身には粗衣をまとつとも自然に
備わった尊い氣品唯一人長者新五平の
館を訪れた

私は旅の者一夜の宿を御願申すといふ

新五平はそれはくは御困りの事遠慮

なく御宿りなされと情ある言葉をかければ

少女は喜んで家に入り寝られた足を休めて夜

を明かしたしかし翌日もその翌日も一向に

出立可なり様子もまた家の仕事を
手伝つて居た

少女の働きぶりにはかげひなをなく何事もよく

気がつき新五平もつくづく感心して居た

少女は暇さえあれば自分の部屋に入り経典
を讀んで居た又少女は物をままつにしない倉の
中にこぼれた米を掃き集めてためて居た

新五平は少女の忠實な働き振りに感心しつては

何か礼を致したい少女は御親切に甘えて一つだけ
御願が御座居ます私は馬がすきなので馬を
(頭戴きたいと頭をたれた

新五平は少女の願を聞いてそれではあの白馬
を二頭あてえよう少女は喜んで貰いつけた

或日新五平は所用あつて近郷に行つた夕方
歸つて来た

少女は勝手元から水を汲んで歸りなさいませ
定めしお疲れの事でせうどうぞこの水で足
をお洗ひ下さいとさし出した

新五平は何事なく水に映つた少女の姿を見

ておどろいた。それはまさしく觀世音の御姿
でありました。思はずその水鏡に合掌
し、いつまでも其の不思議な出来事に考へ
こんでいました。

月日は流れて三年余り少女は十七、八才
になり益々美しく氣立は優しく近郷一円
の評判娘となり諸方の名家から縁談の申
入も續々ありました。けれど少女は妾には
西北六黒ばかりの所に定つた先があります。れ
ば此の事はかりはお断り申上ますとの事。で
縁談はそれぎりとなりました。

其の翌年二月朝まだき裏の馬屋の方で
こゝろ之音がするので下男がのぞいて見れば
白馬が見当らず街道に當つて馬のむづめの
音かする。下男は急ぎ出て見れば白馬に乗る
小女が朝霧の中に悠然と去り行く姿が見える。
下男は驚きかくと主に告げたので新五平は
狂氣の如く走り出て今一度帰らせ給えと
声を限り叫んだが振り向かず蹄の音も

軽やかに西へ西へと去りに行くかくてはなうら
と下男に命じて今一頭の馬を引き出し其の後を
つけさせた。

下男は見えつかくれつ少女の後を追つて今の山野
所に入り御の中央にそびえる馬乗山にかつた
白馬に乗つた少女は山を易々と登つて行く。下男
は石につまびき岩に取り付き漸く山頂の頂上に登り
つき見れば少女の次女は次第に神々しき觀世音
の御姿となり其のまつきりの如く煙の如く
消え失せり。

下男は仕方なく家に歸り主人に告げた
新五平は下男を道案内に頂上に辿りつき
屋敷を造りお堂を建立しとこしへに信心した
家業も益々繁栄しては合の一家となつた。
これより後いつしか馬乗山と世の人々から愛称され
觀世音も俗に馬乗觀音と呼ばれるに
至つた。

塚本

吉備真備 伝説

ハア蜘蛛がとりもつ碁の勝負ちイトネ
昔々の物語 白いあごひげ吉備様か

今も碁を打つ 塚の雪

と、現在の(岡山県吉備郡真備町)金おど
り歌にもうたわれっています。

奈良時代に学者、政治家として活
躍した吉備真備は二度も中国に渡
っています。第一回は聖徳二年(七六
二)二十才の時、十九年向唐にとどまり、儀式

自係の書物、大衍曆、樂書要録など
の文物を持帰り朝廷に献上しました。

第二回は天平勝宝四年(七五三)難波
を三月頃に出帆して航海は数ヶ月、その年
の秋に唐の都長安に到着。この時

真備は遺唐副使位は従四位上、役取は
肥前守。第一回の時、所部仲麻呂も共
に行つたが、彼は唐に居残り二回目

の時に彼は真備と共に帰国の途につ
いています。仲麻呂が黄河浦を出帆す
る時、饒んた

和歌が「天の原ふりまけか小は春日な
三笠の山に出でし月かも」であつた。

この入唐は唐滞在一年のみしかし航海
が往復半年すつぐらうかかって居るので
出発から帰るまで満二年を要しています。

この時の様子を、大江匡房著の「江談抄」
から、不思議な伝説を絵巻物にしたもので

現在、米国のボストン美術館に吉備大臣
入唐絵巻(一巻から四巻まで)として収めら
れています。「扶桑略記」に真備公は三史

五経、名刑、算術、陰陽、曆道、天文、漏刻、
漢書、書道、秘術、雜占の十三道に及んだ
と書っています。

ここでは絵巻物の中のおもしろいとろを
書いて見ました。

港より上って一行は唐の都長安をさ
りて行く。外人接待の宿たる鴻臚館の
高さ約ハメートルの様子のような階段が
あつた。これに到着して、皇帝に会見するま

休む。(この建物は大阪にもあり)唐人が日本

に来た時宿せられた。そこが唐の皇帝の居る宮殿に行き、玄宗皇帝(この皇帝は楊貴妃といふ美人を愛したことで有名後に安祿山の乱が起る)にお目にかかり鴻臚館に引上げられた。夜中ははかりにはならんと思ふほどに雨降り風吹きなとして身の毛だちて思ゆるに、ぬるの方より魁うかがひ来た。「それかし入唐の勅を蒙りより命なすものと思へども口惜しくも凌雲閣の高とのにだましあげられ三七日間飲食を絶たれ遂に樓上に飢死しぬ。然し、かの金鳥玉兔集をとらんため一念怨霊となり四百余州にまたかかむも最後は忘れざるわが国の和歌の一首をもはずかしなから見せ申す必ず故郷に持帰り願はくは勅撰の集の中に加へてよ」といふ。更にことばを続け、「さて魁となりて今宵まうめれたるは、余の儀にあらず。貴殿今日参内の後大臣宰相首を集めて相議り、去年遣唐使を殺せし上は、今年の遣唐使も助け

歸せんことかえつて事を好むに以たりよつて今年の遣唐使もこれを殺せんには難題を出して、その難事にことよせて殺せん」とす。然るに因基と云ふものも、中国に始りて来た日本国に渡らず、この基を命かけて打たせ、負けたる方を殺さんと因る。又この基を打たずば、かの望曲の書を渡すまじとことなり、基を打たずば使命を果すこと能はず打たば必ず負けたる。その時は命なかなべし。これわきの大いに憂ふるところなり。いかかし給ふむとおりに水は吉備公も進退にこに極まり。それは金鳥玉兔集を得ずば何の面目あつて帰朝せん。としてしばし言葉もなかりける。重魂曰く、「これはわきの神通力をもって貴公を守り、この基を勝たせ申さん。さて明日朝廷にての因基の名手は、四百余州の名人と聞かえたる維州の官人たる玄東といふものなり。また彼の妻は、右將軍隆製の娘にて、隆昌女とて、ただ者にあらず。古今の学芸に達し

天文地理陰陽道さん臨からず、殊に因基に
 妙を得て夫、玄東の数段上にあリ、……
 故に貴殿、今夜わが肩に打ち乗り給へ
 貴殿を負うて風の如く身をなし、妻戸より
 忍び入りて、玄東夫婦の相談せるを聞き明
 日の基を打ち給ひぬ、わが又貴殿の影身
 にそつて、神通力をもつて助言せば彼たとひ
 名人たりとも負くることあるべからず」と
 たのもしく言ひければ、吉備公大いに得て維州
 へ仲麻呂の靈に買われ、飛ぶが如くに急ぎ
 行まける。(注、この鬼は阿部仲麻呂と言つ
 のは史実にあぬ、仲麻呂は第二回の吉備
 公の入唐の時を生きていた、死霊と言つのは
 あたらぬ) 鬼の帰つた翌朝、唐人は食事
 を持て来りて、鬼が昨夜来たはずなのに
 吉備公は変つたこともないのに不思議に思つた。
 玄宗皇帝に謁見を仰せつけられ、唐人圍
 みて曰く、女はありとも其はあらず、其を
 打たせて試みんと言ひて、白石をば日本の
 人に打たせ、黒石をば我ら打ちて、このかた

ちにつけて、日本の使いを殺さんと相闘る。
 次の日、案の如く、この上手をつかはして打たす
 るに勝負なし、一説には、玄東の方が負け
 そつになつたので見ていた妻は、黒石を二つ盗ん
 で飲んだ。
 かくて基をおさめんと二つ二つ数ふるに、黒石
 一つ足らず、わが、そこに尋ぬれども見えず、もし
 この石、玄東の方にありて失せたれば、いよく
 対基に勝負はあらず、わが
 もし、吉備公の方にありて
 失せれば、勝負あるか故に
 席のすみずみ縁側にいたる
 まの探し求むれども見えず
 安縁山曰く
 「一つにて生命を失ふ大
 事の詮議」
 玄宗皇帝曰く
 「唐には腹の中を見すがや
 ×光緒の如きものあり
 くれにて皆人を覗くし見よ」



然るに玄東の毒生ける心廻はなかりけり。安縁山曰く「女としても容赦なす国恥辱なり。とうとうその毒逃れん方なく遂にこの女の腹の中に墨石ありきという。

こゝで吉備公は難を買ったという。

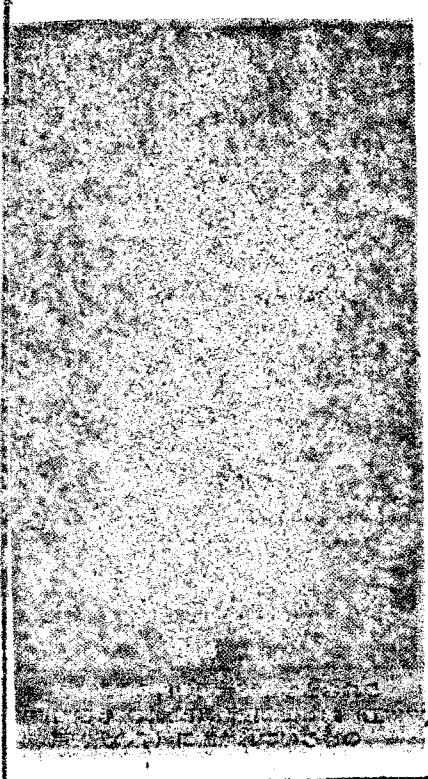
囲碁のことで恥をかいた安縁山は才能人に過ぎたり。文を読ませてその識りを笑わんとしふなり。この国に極めて読みにくき文ありて文選といふなり。野馬台の誌を吉備に読んで見よと言った。

この時よりも前もて伴麻呂の靈魂が現われ「野馬台の誌とは、わが国の未来記である。僅かに五言十二韻にして字は百二十字なれどその文は縦横に乱れて読むこと難し、何れの文字より読み始むべきかを知らず、こゝにありて支那にてお來よく読むものがまゝである。こゝは昔漢の世にありて宝誌和尚の作であると言ふ。ただこの上は一心に仏神に祈り此の難を免がれ給へ」と言ひ然つて靈魂は消え去った。ヤて聖朝また玄宗皇帝の

前に叫び出された。帝は曰く「昨日の器量と云い仁心と云い感ずるに余りあり、よれは汝の雄才よくこの書を読むべし」と。四史六經史漢文選など出されたので吉備公つづつんで読み上げた。こゝで皇女は七宝莊嚴の文台に玉軸の一巻を開かれ、読めと言われたりか左國の野馬台誌。汝速にこゝを讀まば、かねて望める金鳥玉兔集を授くべし。」と

吉備公心を鎮めて見てみると、金色の糸を引いた蜘蛛があつた。その虫の這い行くままに読めば文字一字をも誤らず読み得た。かくて玄宗皇帝の勅命降り、金鳥玉兔集その他、種々の

水	丹	臨	牛	龍	白	昌	孫	坂	谷	終	始
流	壺	鼠	漁	游	矢	徴	子	田	孫	臣	定
天	後	黒	食	雲	水	中	動	魚	走	君	壤
命	在	代	人	急	寄	干	戈	膽	生	周	天
公	三	三	責	城	胡	後	萬	翔	羽	枝	本
百	王	王	赤	土	空	終	百	世	祭	祖	宗
雄	英	英	與	茫	為	東	國	代	成	興	初
皇	稱	稱	丘	々	逆	海	氏	天	終	治	功
流	大	大	青	中	國	司	右	工	事	法	元
飛	野	外	鐘	鼓	喧	為	輔	翼	衡	主	建



宝物を賜り、帰朝したという。
 武器、兵学にもすぐれ、橘諸兄政権のもと
 の軍事改革で、藤原仲麻呂の反乱鎮
 圧に中心的な役割を果たしたとされ、
 最高位は正二位。天平神護二年(七六六)
 には、中納言、そして大納言に進み、同年
 十月二十日には右大臣に任ぜられ、宝龜
 二年(七七二)辞していきます。
 日中友好のかけ橋として、長安(現在の西安)に
 日本庭園を設けて、その中に真備の顕彰碑
 をまき舟をめぐりに建てる計画が送られてくるよう
 です。

古墳研究部会情報

山口哲昌

一、古墳講座

今回(九月土旦)の講座は11月の後
 半に予定して、いよ、部生古墳丘墓ノ前
 期古墳を中心として野外講座の具
 学地の選定等についで、検討致し、ま、
 三、次回の十月十六日は、各皇宮地の資
 料を提出して内容の検討を、たいと考へて
 あります。

二、実測調査予定

去年実施した正福寺裏山を境に次
 りで今年には合の野古墳の墳丘実測調査
 を予定してあります。時期については、十月の
 後半から11月の前半にかけて、工事前指者の
 承諾を得て下草刈りを行い、12月に入っ
 て本調査を開始したいと考へてあり
 ます。去年同様よろしく御協力下さ
 り。

閑話 休題

二月の例今で登った歳五山の北北東約
八〇米、国道一八二号線を跨いだ小高い山
の中腹に由緒ありげな古寺のたたずま
いがある。

数年前、千白町に転居した私は足の赴く
まま附近をよく散策する

そうしたある朝、私は国道からそれた参
道入口にたつ左右一対の大きな石灯籠の間
を通り抜けて、勾配四〇度はあろうかと思え
る急坂をのぼつて行つた。

一五〇米程のぼつた所の曲り角に小さな首無
不動尊が祀られていて、中年の婦人が清掃し
ていた。挨拶を交して更に道を右手に行くと
二階建ての山門がある。

「寶壽院」と書いた大きな横額が掲げられて

いる。建築様式から、かなりの古い年代のも
のであることが窺がえる。

内を這入ると本堂(大悲殿)と庫裏が
並んで建っている。庫裏は古かた感じだ
が本堂や境内の土壁、それに山門の一部
は最近修復工事がされたらしい。

庫裏には人の気配が全くなく軒先の一隅
に高さ八〇センチメートル程の緑青の付いた半
鐘がぶらさかっている。

半鐘の上のせてある木槌を取って三回
打ってみた。仏法僧への畏敬をこめて、
静かな境内に、ふと人の気配がして一人の老
人が内を這入つて来た。

人の好きそうなる老人は軽々しく会釈して
私の前を通りすぎ、大悲殿の火類かかか
つている本堂の前に類つき、合掌して敬
虔にお祈りを捧げた。

私はその古老から、この寺の由来や、庫裏の軒先に吊るしてある半鐘が紛失した事件はど因かせて貰うことができた。

古老の証によると、この古刹は神宮寺といひ、約八十年前の元享八年に全国を修業行脚して来た歡快僧正が、この地に到り開基したものであると寺に伝わる古文書に記されているそうであり、この地方の豪族や民衆の信仰の據りどころとして、あがめられた。

後世、本地垂迹説に基いて神仏混淆の風潮のなかで、神宮寺の裏山に八幡宮が造営されるに及んで、神宮寺が八幡宮の別当となり、神祇神事一切も神宮寺僧侶が取り仕切り、寺院の権勢は大いに高まった。

近世に至り、無住持の寺となり、神社と共に衰へた時期もありたが、往時に於ては寺の規模といひ、建物の構築様式といひ、備後一円

では、有教の寺院であつた由である。建物の構築様式といへば、山門の上に鐘楼があるというも珍らしい。

梵鐘は戦時中に徴祭されて今日その音色を聞くことはできない。さて、半鐘の一件であるが、去る五十二年九月、福山地方を襲つた颱風のため庫裏は全壊し、本堂及び山門、土塀などは半壊するといひ、被害に遇い、その取り片付が一段落した十月、半鐘が行方不明になつてゐるのが判つた。

神宮寺を以て八方手をつくして捜索したが、遂に発見することが出来なかつた。寺宝類は殆んど無事だつたのに半鐘だけ失つて残念なことをと諦め、いたところ、七年

後の五十八年十月、九州直方市内の古美術商から福山市教育委員会へ半鐘について

の間に合せがあり、市教委が関係寺院に諮
問した結果、神宮寺のものが盗難に会った
とが判明した。

古美術商の語では、「最近この鐘を入手し
たが鐘に刻まれている銘文から寺の大切
な品物であらうと推察され他への転売
も憚られるので、お返ししたい」というこ
とを、神宮寺が買戻したが、その際、先方
の商人が「所用を兼ねるとは言ひながら福山
寺で持参して下さったことに深く感謝し
ている」とのことであり、た
だ、因みに鐘には次のようは銘文が刻まれて
いる。

奉寄附喚鐘一口為
備之後州淺津郡千
田邑八幡山神宮寺
阿弥陀院院什物

伏祈宗心信士妙光
信尼六親并十方舍
靈成三菩提也

享保十六辛亥九月吉日

願主 沙門 胎蓮

施主 福山住人 宗仙

そのあと、老人は私に、「この寺から南に尾
根づたいに行かれると古い塚や墓石、
石橋なども多くあると教えてくれたが、陽
も犬ふん高くなり、またの機会に教策
したいと思ひつゝ、老人に謝辞をのべ
て神宮寺から離れた。

宮橋系叔記

伝説 奇藤定盛塚の由来

旧宜山村向永谷本谷の金蔵坊か
 の道は三白ノ一トル、松永緑の鼻道
 ます。昔から実盛塚とよほれこい
 ます。平家の都落ちの時、奇藤定盛か
 追われ、六騎が落ち、南
 の山、谷を越して、こ、ならん
 夫だと思ふと、空腹と疲れが
 来、全く歩けなくなり、
 時は秋。ふと見ると、茜色の稲
 穂が豊かに波うつてあり、六人
 こ水一時の空腹のざと、そ水を
 水稲穂を手でささ、手のひらで
 粒をすり合わせ、吹きわけは、
 生米を食べていきました。村人が
 そこへ下り通りあわせた村人が

米ドロボリだあ、と村の人々に知
 らせて、手に手に竹槍や、かまを
 持って押しかけて行つて見ると、
 六人は稲の間にほい、廻つて逃げ
 しました。けれど、稲穂のゆれ
 ですぐわかり、ア、あそこだ、と
 追いつめられ、村人達が行つて見
 ると、武士達の姿は見えず、見た
 ことのな、様な、鎧を着た形、六
 人、な、イナゴが、腹をたう割り六
 匹死んでいました。
 村人達は、武士が盗みと恥ぢ、
 妻身してイナゴになり、割腹して
 死んでいったものと思ひ、その心
 根を哀れみ、ねんごろに葬つたと
 云うことです。
 又この墓の下に、寺迫屋敷が残
 つていて、光明寺虎寺址と伝えら
 れています。

私考

仲と「藤原の全戦」に於いて、
 手塚大郎光盛の討たれたと云う史
 実が「あり、此の地に伝説は信じ
 が「送りの行事」戦前各地に伝わる
 虫送りの行事、
 鐘、実盛「ヤア」と鳴らして、
 道と「はやくしな」竹ふさを持った
 行く村の「人」の姿が見えました。
 送りの行事がどう結ぶのか、
 考えさせられます。

城郭部会情報

八、九月と猛暑等の理由によつて
 休止していた当部会も十月からは活
 動を再開する。但し、十月は例会へ
 の協力を第一とし、本格的な調査行
 は十一月からである。

まず、十月二〇日(日)には、福
 山市熊野町、ト一兼山城跡の踏査
 及び草刈を行なう。これは「十月例
 会」の準備の一環としてのもので、
 多数会員の御協力を得たい。

参加希望者は左記迄「E」を
 (〇八四九)五三一六一五七
 田口義之

猶、十一月以降の予定にっしては
 今後、会報等を通じてお知らせしま
 す。

沼隈郡の大庄屋有木家

一統の略系

人皇第十代崇神天皇の御代四道
 將軍各地に派遣され、人皇八代孝
 元天皇の御子吉備津彦之尊吉備の
 地に下向し給う、其の時別当賦と
 し、隨行したのが有勉氏であり吉
 備津神社東方四百米の地に別所を
 賜り住居とした、この地は源平合
 戦鹿ヶ谷の謀議で有名な藤原成
 親の流配の地でその墓のある所で
 高麗尊跡地でもあります。

大因元年備後一の宮に吉備津神社
 の分祠に当り祠官として宮内に未
 住し公田百貫の地及び神地を賜り
 神宮寺を現在の櫻山神社の地に建
 して代々祠官を務め宮慈俊(櫻山
 四郎入道正信)元弘年間舉兵北條
 軍と戦い最後には敗戦となる
 その後天文年間吉備津宮神職有木

慈俊後守の弟能登守宮政信より豊松の
 庄を賜ひ有木中山城に居を構へ法善
 系も代寺として建立しこの地を治め
 た、孫久親が尾道に移り三世親宗に
 至り家亡び原田町梶山田に転じ現在
 末裔十数戸在り又赤坂の地に沼隈郡
 の大庄屋として奉仕したの徳川
 の始め福島正則は神地を致収せしめ
 大庄屋らしめる。今も宮内に土井家敷
 跡有り(家跡を土井と云ふ)現在の神
 京病院が土井の旧宅跡であり墓も五
 十餘基あります。居宅は約三反歩余
 今津宿神返宿回の御小鉢所にて御成内
 か右側に、秋の大木二本あり殿様と
 道中奉行が馬を止めて居たと古来の
 話を聞いており、最後の庄屋有
 木長三郎重秀は安政年間より庄屋と
 なり明治四年致し年令七十歳、土井
 庄屋は地方の小豪族然として権力と
 勢力を有し家の子も四十人余り養ひ

庄廢りして民政に力を注ぎ善政を行ひ明治四年有姓一揆の時も焼打の難を逃れし。明治二十年頃家産傾き吳市に転出し分家有木元善は明和の頃の医師にして博學孫は黄老の學に造じ。道學正要一卷を著す、全全の書は道學叢書、強國、富民、戰勝等七編よりなり其の京本は福山城古文書館にあり。又医書、吐瀉歌言も著す。京都山脇東洋の門弟なり今は家絶せし。大きな自然石の墓七基があり又本郷町昌源寺は大場山城主古志清左衛門の白寺は安政年間八世宏寛禪師が今の本堂を再建この人亦赤坂有木家の産なり。有木姓は豊松には一戸もなく末裔が福山市に住す。又土井庄屋は岡山県山陽町に三病院を興業中、各地の有木家は福山に約四十戸内赤坂十戸尾道に

約四十戸内福山十戸山陽十戸赤坂十戸神迎宮内約十戸。家紋は赤坂の系豊松の有木家は五三の桐紋、その他は木系家紋の如し。豊松を除く各地は現地相查をしまし及か何分は古き時代の故証物件に乏しく御もな

い世況です、
佛説阿彌陀經のなりの如是扶脚
で文書は御救を頼るのみ

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

宮宗正人記

ふるさと断章

石井良枝

ずっとずっと以前、わたしはまだ幼い子供
だったころのことでした。

そのころの総社町は、東西に走る一本の
長い道に沿って両側に家々が立ち並んで
いるだけでした。家のすべりろには、田
畑がフツキ春の麦畑では雲雀が舞い
あがっては鳴き、秋がくると稲穂が遠
い山の麓まで黄金に輝く田園風景
がひろがっていました。

宮本町のほぼまん中に位置している総
社宮は、わたしたち子供のころを遊び場
でした。境内の高くそびえた松や椿の
木立の陰には、天神様をはじめ小さな
祠が点在していました。社殿の裏庭か
らは細い流れが小川に続き、川淵の
草むらには、「うさぎ」と「かめ」の実

が潜んでいました。わたしたちは
笹舟を流しては走り、立ちまっては
蝉しぐれを聞き、そらら一帯は遊び
の天国でした。

四方に伸びた回廊は、雨の日、雪の
日の絶好な運動場でした。一間柱に渡
された巾広い横木は、逆あがりのでま
鉄棒となり、高とびの横棒にさえ早
がわりをするのでした。また回廊の
入口近くに金網張りの廊宇があり、そ
こには仁王様が立っていました。薄暗
いの中は、かくれんぼ遊びの安全地帯
でした。

わたしたちは、くる日もくる日も、ひが
な一日このお宮で遊びつづけてま
暑い夏の日、いつものように隣りの
一っちゃん、律っちゃんことこのちの
ビッグエ
イ大将ー強い女の子でしたから、男の子
もみんなこっけい呼んでいましたーとか、ほ
のみんなとお宮で遊んでいました。

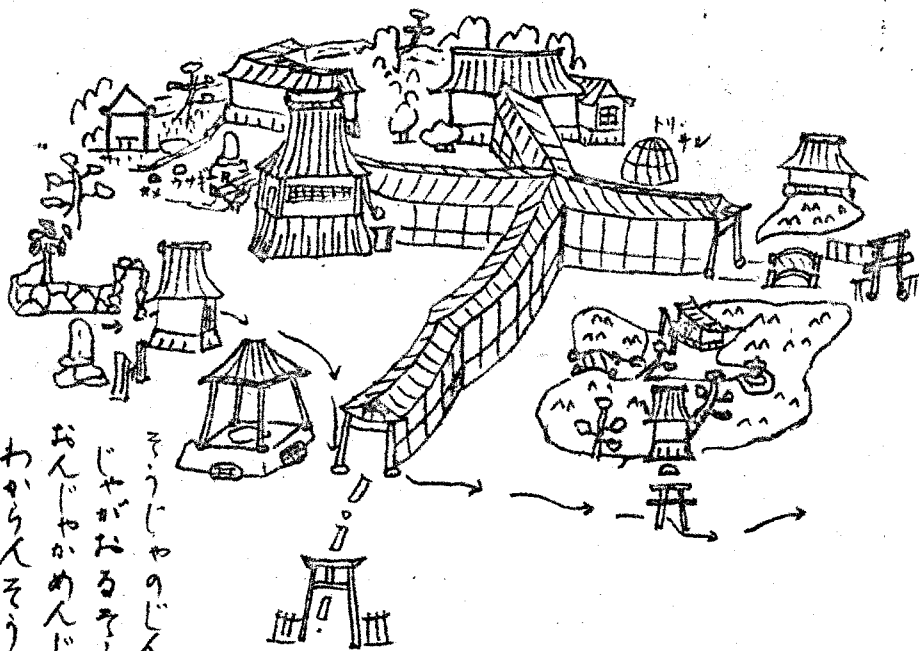
「いろはは旅館は、こちら？」。
ひとりの見慣れない老爺が、だれにと
もなく聞きました。

「こちらじゃ。」。
と叫びながら、わたしはさう走り出して
ました。

町並みには三軒の旅館があり、いろは
旅館はわたしの家の真向かいにありま
した。わたしたちは、町並みの「軒く」の名字
を西から東へ、東から西へと、町はずれの
部落の家でさえも、南へも北へも自由
自在に言いあてるのが自慢なくらいに
知りあっていました。ですからこの見慣
れない老爺が、永井荷風その人だったこと
を知ったのは、ずっと後のことでした。

永井荷風は、昭和十年三月九日夜半にそ
れまで二十六年間住みなれた偏奇館を東京
の大空龍巻で焼した。そして六月はじめて
友人の誘いで関西にさすらい行くことを決

べした。岡山には工場もなく食糧も豊富
なりと聞いて、十一日正午には岡山に着いた。



そうじゃのじんじゃに
じゃがなるそうじゃ
おんじゃめんどじゃ
わからんそうじゃ

て、でまた襲撃手にあひ、七月はじめて郊外の三門町に移り住むことになった。

八月十二日から十五日には、県北の勝山町に避難していた谷崎潤一郎氏を訪れたりした。

『荷風全集』一 断腸亭日乗 第二十九巻に
八月二十日、月曜日 晴。三門町の寓居に

は同宿人との関係追々日を経るに従ひいはしき、事の多くなりたれば、未明に岡山駅に至り汽車切符を購ひ、午後吉備郡総社町の旅宿以呂波に至る。

……(中略)……総社町にも松林の間に古祠あり、境内ひろく回廊長し、水清き池は菱の葉に蔽はれたり、停車場前の道よりこの神社の境内をぬけて歩むが宿屋以呂波に至る捷路なる由、既に聞え知り居たれば、其あたり遊べる子供に聞えたり、て行くに迷はずして宿屋の前に至るを得たり……(中略)……八時頃まで夕風いつもの如く蒸暑者甚しかり、眠に就きてより風

次第に涼しくなり、深夜明月の光窓より入りて蚊帳を照しぬ、宿泊料一日三食にて十圓なり」

九十日近くも地郷で罹災民として所々を漂泊していた荷風が、いろは旅館に寄宿したのは、廿七日、廿八日、廿九日、卅日の四日間であった。八月卅一日に東京へ向かう車中で『総社町以呂波旅館のつくり握飯、奈良漬、葡萄汁の美味終生忘れまじと思ふばかりなり』と、その後も時折りのころの感慨をのべています。

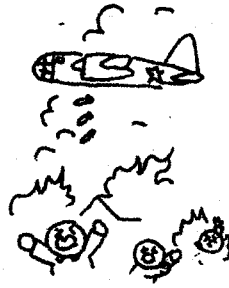
年ごとの夏に仙台を立って帰総するわたしに、亡き父の愛蔵した荷風の筆になる一枚の色紙は、淡い光をうけてきらりとひかる朝露のよう、遠く消えかかるとそのことを語りつづけます。いまはもう黒茶ぶちの眼鏡・ベレー帽・メリヤスのシャツ、そしてステッキだけが

不思議にはつきりと浮かびあがって
くるだけです。

紅梅に雪のふる日や茶の稽古

荷風

40年前



昭和20年八月八日午後十時半より九十余機のB29の編隊が福山を襲った。数日前にこの日の空襲を予告するビラが福山に降ったが、憲兵隊の追索等で避難する市民は少なく、数百人の死者を出した。

今年の七月、福山空襲を記録する「秩福山空襲の記録」が出版された。四十年たっても被災者の記憶は鮮明である。二一説を。

十月の行事案内

・第30回歴史講演会

日時 十月六日(日) 午後二時～四時

場所 福山市民会館第一会議室

テーマ 福山市熊野町一乗山城主渡辺氏

について

講師 当会副会長 田口義之

会費 会員二百円・非会員三百円

問い合わせ先 〇八四九一二一三九四〇 神谷芳

・十月例会

日時 十月二十七日(日)

場所 熊野町・機倉・山南・河武免の史跡



当日はバスでまわります。バスは五十人乗りを借りていますので、申し込み制になります。会費・集合場所・時間・申し込み方法は、追ってご連絡致します。

古(大和)を偲ぶ

勸定奉行 井上タケ之介

ヤマト・ヤマタイ国、ちよとと語呂が似ていると思いませんか。この前、角川の日本史探訪を讀して、僕は、この妄想に取り付かれています。天皇家、それは、神武天皇以来万世一系の家系とされて、その祖先は神とし、神祇に包み込まれてしまっている。

各氏族の取りまとめとして、巫女のごミコが、女王として君臨して、天皇家の歴史と重複して、おもしろい。飛鳥の里は、この天皇家の激動期、下代の改新のあった飛鳥板蓋宮がある。行ってみて驚いたことに、この宮と、石舞台古墳が目の前にあった。しかも、古墳の方へ向いているのだ。入鹿が、中大兄と鎌足に殺された時、彼は都下を何故叫ばなかったのだろうか。地図で見ると、その距離1km程、僕の声なら必ず呼んでみせる。ちよとの空室殺人事件、残った蘇我

一族は何故、この事件を解明しなかったのだろうか。父は、自殺してしまふ。謎が謎と呼ばれます。おもしろくなる。ちよと小説でも書けそうですね。他では、高松塚古墳(あまりにきれいに古墳が、着飾っているのびっくら)、欽明天皇(猿石(雨がふり出し、車へかけ込む、何かかわけもわからず)、川原寺跡、飛鳥寺(山田寺跡にも行きたかったヨウ)、空生寺(仏通寺の横だ)、長谷寺(吉備津神社の回廊があった)、と思っ出したながら、地図を見てみると、あ、この近所にも、こんな遺跡があったのかと、自分の勉強不足を反省する次第です。

今度行く時は、親子3人(?)、もうちよとゆっくり(お土産を買おう時由もとて)と勉強してから、行ってみたい。



編集後記

◆先号を発行して間もなく

今号の発行となリスタッフ

一同(編集部と会員有志)

秋の夜を徹して机に向か

ています。今号の内容及

びボリュームは27号の会報

の中ではマアマアのランク

ではないでせうか。

(ヒカエメニ)

!! 迄ご批評!!

◆次号は本年最後の号とな

ります。特集内容は後日お

知せ致します。

原稿は常に募集中です。会員

の皆様からの楽しいユニ

クな原稿を左記へ送って下さ

い。

〒720 福山市川口町 398-13

種本実